

〔個人研究発表〕

「人間科学の系譜と方法」……………札幌学院大学人文学部 奥 谷 浩 一

「哲学と人間学—アドルノの経験に即して」

……………大阪府立大学総合科学部 細 見 和 之

「人間科学の行方」……………早稲田大学人間科学部 圓 岡 偉 男

司会 札幌学院大学人文学部長 中 野 徹 三

司会 今日の個人研究発表は、午前10時～12時にかけて3名の人間科学研究者の方からご報告をいただくことになっています。1人30分ほどお話しただいて、10分前後を質疑討論にあてるということで進めていきたいと考えております。私は司会をさせていただきます、札幌学院大学の中野です。人間科学のシンポジウムは、フォーラムとしては3回目でありますけれども、しかし人間とは何かという問いそのものにつきましては、おそらく全ての問いの中のもっとも根本的、あるいは最高の問題として古代以来問われてきた問題であろうと思います。そして、それはきわめて困難な多くの問題を含んでおりまして、昨日の北大の丹保総長の話にもありましたように、その問題にたいする回答の精度という点につきまして、自然科学が6桁だとすると人間科学は1桁くらいといわれても仕方がないわけです。しかも、人間とは何かという問いに対する回答自身も非常に矛盾に満ちたものを含んでいます。これは人間という言葉が、1つは自然の産物であり、土から生まれたものであるという意味をもっていて、これはヘブライ語のアダムという名前に残っています。それからラテン系の言葉を語源とするものもそうです。もう1つは、人間を考えるもの、精神、精神的な存在とするものであって、ゲルマン系では人間をマンとか、メンシュと呼ぶ点に表われております。そういう点から申しましても、人間に対する問いは本当に矛盾に満ちたものでもあると同時に、人間というものは、対象化を求めながらも、対象化を絶えず乗り越えて行く、超越する存在であるという意味で、人間が問われ続けてきたわけであります。

そういう言葉の問題を越えて、現在人間が存在の危機にあるということは、北大の総長が様々な面から解き明かされた点であります。人間とは何かについて様々な答えがあるからということでこの危機を放置することは許されないという段階にきているといわざるをえません。

そういうわけで、今日のお3人の方のご報告の1つは人間科学の経緯と方法です。ここでは、人間科学が成り立ってきた歩みというものを奥谷さんが問題にされるはずで、さらに現在直面している問題の1つで、これは細見さんの哲学と人間学というテーマで問題提起されることになると思います。それから人間科学はどこへ向かうのか、人間科学の行方というテーマで報告を圓岡さんからいただきます。したがって、大変時宜を得た構成になっているのではないかと

と思います。是非このシンポジウムを成功させるよう、皆様方のご協力をお願いします。最初に本学の奥谷さんから、「人間科学の系譜と方法」という問題につきましてご報告いただきたいと思います。

奥谷浩一「人間科学の系譜と方法」

奥谷 ただいまご紹介いただいた奥谷でございます。今回の第3回フォーラム人間科学を企画した際に、中野学部長から何か研究発表をやれということを抑せつかりまして、学部長命令だということで、これには逆らえず、専門外の領域について話をするは大変心苦しいんですけれども、あえてやらせていただきたいと思います。

私はドイツを中心にずっと哲学をやってきた者でして、最近いわゆる共通教育その他で倫理学などの講義を担当している者です。その立場から報告をするということになります。

今年1月に私が書きました論文がありまして、大変雑駁なものでありますけれども、それを中心に報告することにならざるを得ません。その抜き刷りが配られておりますし、『札幌学院大学人文学会紀要』の第60号が皆様のお手元にあると思いますので、それを参照していただきたいと思います。



まずはじめに、学術的なシンポジウムというかたちで人間科学に関する議論が行われてきたその経緯が我が国ではどうであったかということを踏まえる必要があると思いますが、しかし、その我が国の人間科学に関する議論にはまたさらに先立つ前史があるわけです。そして、他方では文部省の大学設置にかかわる指導がありますので、現時点ではそういう様々な局面からきわめて錯綜した状況が人間科学において

つくり出されていると言わざるを得ません。したがって、人間科学の対象と方法をどう考えるかという問題は大変困難な問題だということになるわけであります。過去2回にわたって行われました「フォーラム人間科学を考える」という集まりで、この問題に関してどういう意見があったかといえ、とりわけ昨年早稲田大学の所沢キャンパスで「第2回フォーラム人間科学を考える」が開催されましたけれども、そこで提起された特徴的な意見は3つほどに整理されるように思います。

私の論文の72ページにその3つを書いておきました。その1つは、自然科学の方法を基調と

しながらも、医学などをはじめとする科学がその専門分野だけに閉じこもってしまっていて、人間の問題と科学の進歩が切り離された形で進んできたというということに対して一定の反省をしたうえで、そして科学の追究ということと人間に関する知見とをもう少し結合していこう、あるいは科学にももう少し人間的な方向付けを与えていこうという考えでございました。それからもう1つは、これは臨床心理研究の研究者から出た発言であります、自分は直接科学的方法を用いてはいないが、しかし直接人間を相手に研究しているわけで、したがって人間が全体的な存在であるという観点から見ると、人間を科学的に研究することに一定の限界を感じざるを得ない、したがって科学それ自体の意味を問う哲学あるいは文学、そうしたものを含めて人間学を研究する必要があるのではないかという見解です。それから3番目には、人間科学と行動科学とはほぼイコールであると考えてよいのではないかと、人間科学の目的が人間を説明することではなくて、人間を理解するということにあるとされていることで、よけい問題が分かりづらくなっているのではないかと発言がありました。

したがって、2回のフォーラムを積み重ねる中で、3者3様の見解が展開されるという状況でありますので、一層状況が複雑なわけですが、こういう3者3様の議論をかみ合わせて今後どのように一致点を見い出しながら議論していくかということが、これからの人間科学をめぐる議論のポイントになってくると思います。人間科学と人間学と人文科学など類似した諸カテゴリーがございますが、それらがどう定義されて、どう関係しあうのかという問題をはじめ、様々な学問論的な問題が残されているわけであります。人間科学が、文部省との大学設置基準とも深くかかわりながら、まだしばらくは揺れ動きながら進んでいかざるを得ないという状況にあると思います。

そういう問題にアプローチする1つの前段階としまして、人間科学の歴史について考えてみる必要があるだろうと思ひまして、その次に人間科学の若干の前史についてまとめておきました。サイエンス・オブ・マンという学術用語はもちろんかなり古くから用いられてきたわけであります。そういう言葉の意味だけを詮索することにどれほどの意味があるのかという問題もございすけれども、人間科学には様々な考え方が存在するのだということを踏まえるということは決して意味のないことではないだろうと思っております。それで、元大阪大学の徳永恂先生などにも教えられたことでありますが、その人間科学のタームを追いながら人間科学の系譜を調べるということを、人間科学とは何か解き明かす前提作業の一端として、我々哲学者はやっていく必要があると思ひます。それ自身が1つの大きな仕事だろうというふうに思っておりますが、しかし、まだそれほど進展しておりません。それで時間もあまりございませんのでしよらなければなりません、フランシス・ベーコンというイギリスの哲学者は、私の調べた限りでは、サイエンス・オブ・マンという言葉は直接使っていないように思われます。しかし、類似したカテゴリーあるいは、ほぼ内容を同じとすると思われる言葉使いがございまして、このベーコンから大陸の、特にフランスの百科全書派にこれが受け継がれてゆき、その

後の学問分類が形成されていったという経緯がございます。そのあたりは、残念ですが、詳しくは触れることができません。そして、このベーコンを受け継いでヒュームという哲学者がサイエンス・オブ・マンということを直接に語っておりまして、『人性論』と訳される彼の主著の中で直接にこれを用いているわけです。ヒュームは、人間の精神上の問題に実験的・推論的方法を導入しなければならないという問題意識の上に、人間の科学的な理解ということを追求めしながらも、人間性の原理という基礎の上に諸科学の体系化を行おうという問題意識をもっていたと思われます。ヒュームの場合、人間の科学は、論理学・道徳・クリティシズム・政治論という4つの主要な領域からなるものでありました。そういうように様々な人間科学の歴史というものがあるわけでありまして、そういうことをきちっとおさえて現在の人間科学の問題とつなげて考えていくということは、いろんな意味で意味のあることではなかろうかと思っております。しかし、詳しく触れるわけにはまいりませんので、省略いたしますが、しかし、確認しておきたいことは、ディドロとダランベールの百科全書の中にも、そしてヒュームの人間科学の中にも、人間のモラルの問題がきちんと位置づけられていたということであり、これだけははっきりと言っておきたいと思えます。

しかし、我国の人間科学の議論に直接先行するのは、こうした哲学者の人間科学では必ずしもありません。それから、今世紀前半にドイツの哲学者マックス・シェラーによって提唱された哲学的人間学の潮流でも必ずしもないだろうと思えます。それは、やはり今世紀の30年代に入ってアメリカ合衆国で盛んになったいくつかの動きであって、これが我国の人間科学に大きなインパクトを与えているだろうと考えます。

それで、75ページにカレルを若干引用しておきました。1935年にアメリカで当時の世界的なベストセラーになったアレキシス・カレルの『人間—この未知なるもの』という本があります。この本の影響はかなり大きいものであっただろうと思えますし、たんにベストセラーになっただけではなく学問の世界にもこの影響は一定の程度及んだであろうと思えます。それで、このカレルの主著を読んでいますと、カレルはノーベル賞を受賞した卓越した生理学者であり医学者であったわけですが、そのカレルが現在の人間科学に直接通ずるような問題意識をもって人間の科学を考えていたということが大変良くわかります。科学技術が飛躍的に発展したことで現代文明がつくり出されたわけですが、彼は、そういうものをつくり上げた人類がむしろ文明そのものの発展によって身体的にも精神的にも混乱と退化の危険に直面しているという危機意識をもっておりまして。そういう危機意識から人間の本質というものを総合的に知ること、全体としての人間を知ることが必要だと彼は言います。しかし、学問は極端な専門化によって分析という面が進んだ反面、それを総合して人間に関する作業概念にまとめていくという点ではきわめて遅れている。彼はそういう強い課題意識を抱いていたわけです。

さらに付け加えたいことは、人間に関する作業概念をつくり、諸科学が与える人間に関する知識を人間の科学として統合し、その上で先程言いました、現代文明のただ中にある人間自身

とその生育環境を革新するという実践的な目標をカレルはもっていたということです。もちろんカレルは、こういう作業のために、人間の肉体と精神に関する専門的な知識を求める科学者と、そういう専門的知識を全体的な観点から総合することができる科学者の両方の協力が必要であるということで、その具体的な研究プランをも提示したりしているわけであります。さらに、このカレルが人間の科学を力説しながら、たんに医学・生理学のレベルにとどまることなく、現代人の道徳的な退化、モラルの面での問題、精神的な安定、そうした問題にもしっかりと目配りをしていたということは、見落としてはなりません。カレルのいう人間の科学には明らかにそういう問題意識が貫かれていたということを確認しておくことが重要です。カレルの思想にはもちろん、現代の水準から見ますといろいろと弱点もあったわけであります。彼には、神秘主義的な側面がありましたし、優生学的な発想その他も指摘することができます。しかし、哲学者以外の分野の自然科学者が人間の科学をまとめようという課題意識をもち、実際にある程度のまとめを行ったのはカレルが先駆であって、彼の著書はそういう業績として大きな意義をその後ももつことになったと思います。

おそらくこのカレルに触発されて、その明くる年、アメリカのラルフ・リントンが『人間の研究』という本を公刊しましたし、そして1945年に編著という形でいわゆる『世界危機における人間科学』を出しました。この流れはさらに、第2次世界大戦後になってジョン・ギリンが編著となった、いわゆる『社会的人間の科学のために』という本になって現れているだろうと思います。それで、これらのアメリカの人類学者または社会学者の研究は、このカレルの定義した側面のうち、学問分野の極端な専門化に一定の歯止めを加えて、少なくとも関連する境界領域で、関連する諸科学の共同研究ができないだろうかと考え、そのことが人類学や社会学の分野に跳ね返るプラス面の効果というものを考えて、カレルの問題意識を一定のレベルで受け継いでいったと思います。しかし、その間アメリカでは、これは私があまり知らないことでもありますけれども、行動科学の成立という大きな出来事があります。したがって、これらの流れはそののちかなり錯綜した関係になるわけでもありますけれども、1962年にケネディ大統領の元で『行動諸科学の強化のために』という報告書が出まして、行動科学の基本的な見解が定式化されるという経緯がありましたことは見落とすことができません。

したがって、そういう様々な経緯を経て、我国において人間科学が語られ出すということになったわけでございます。79ページに第4章としてそれをまとめておきました。私の知る限り、日本において学術的なシンポジウムという形で人間科学が論じられたのは、1962年に日本学術会議の内部で長期研究計画調査委員会が設置されまして、その総合プロジェクトを検討したときに、人間科学総合研究所という構想が浮かび上がった関係で、そのための準備としてこの最初のシンポジウムが行われたようであります。これを見ますと、かいつまんでしか申し上げられませんが、昔懐かしいガリ版刷りのテキストとして残されている資料があり、そういう貴重な資料ですから、少し長く引用しておきました。その中心的な推進役を果たした学者が、

やはり行動主義の立場に立つ心理学者だったという経緯があるように思います。81ページの注の23, 24と番号が付いている引用箇所にはそれが典型的に現れているわけです。たとえばそれは、この人間科学の総合研究所の案は自然科学に重点を置いたもので、その方がより必要であり成果も上がるというふうに考えられる、人間科学と behavioral sciences とはほぼ同一のものと考えていただいて結構です、という見解に表れております。さらに注の26にあるように、自然科学の立場を理解しない人たちが集まって議論しても意味のないことだと、意志の自由などを振り回しても意味がないことだと、心理学が中心となってそれも現代の自然科学的方法を根拠にしてやるということが重要なのだという指摘にその考え方が端的に表れています。

そうしますと、カレルのあのきわめて多面的な問題意識から、人間科学、直接我々が議論しています人間科学が出てきたとすれば、日本の人間科学はカレルの問題意識とはかなりずれたところに来てしまっている。一定の偏差を受けた形で日本に人間科学が上陸してきたというふうに言えるかもしれません。そういうことを踏まえながら、人間科学の方法をどう考えたら良いかということで、84ページ以降、全くの暫定的な考察にすぎないんですけども、いくつかのことを書いたわけです。

最初に言っておくべきことは、歴史的に見ても、さまざまな人間科学があったし、今後もありうるということです。このことは、たとえば自然科学的に一元化された人間科学だけが唯一の人間科学ではないということです。

次に、行動科学または行動工学という学問は、客体としての人間の法則定立にかかわる科学でありますし、実験とその成果を数学的に処理していくという強力な武器をもっており、成果が客観的に見える形で示されるという点ではもちろん大変優れた方法であります。そして、そのほかのこういう方法をとらない分野にとってもひとつのモデルとして意味をもつ、そういう領域であろうと思います。しかし、人間科学がそれだけに尽きるわけではないということも同時に言っておかなければならないと思います。人間科学とは何かを議論するとき、学問論的に大上段にかまえてものを言わない場合でも、我々の研究者同士の意見交換の中では、人間科学というのは人間を科学的に研究することだと言って、それで能事終わりとされてしまうことがしばしばあります。しかし、そうやってしまったあとは、もうそれ以上の理論展開は何もないわけです。そういう形で人間科学というものが何か科学主義的と申しましょうか、自然科学的一元論のような方向にもって行かれてしまうような傾向が強く見られます。

それで、最近の人間科学に関する書物を私どもの大学でも集めておりますが、『人間科学としての何々学』という大変おもしろそうなタイトルをもった本を見つけまして、それを読みますと、ほとんど人間科学について展開がないものがあります。諸科学の総合とか、境界領域の共同という観点すらもないような、たんなるファッションとして名前を付けたにすぎないような、そういう本が時たま見られるわけでございます。やはりそれでは人間科学が泣くだろうという気がするわけでありますので、そこで我々としてはそれ以上のことをもっと考えなければ

ばいけないと思うわけであります。

特に私が言いたいのは、全体としての人間には、自然科学的な方法になじまない分野がたくさんあるということでありまして、それを科学化していくという課題が重要です。その中には、とりわけカレルの問題意識にありました、たとえば、現代人の道徳的な退化をどうくい止めて行くかという問題もあります。これは、昨日の北大総長の丹保先生の「文明の転換点に立って」というお話の中にもあった問題であります。そういう問題を我々が科学化して対応策を講じていくかということが、おそらく21世紀にはきわめて重要な人間科学の問題となっていくだろうと思います。物質的な生活が一定程度満ち足りている、最低限の必要は満ち足りているということから、その次に何が出てくるかという、やはり人間の精神生活の安定だろうと思います。そういうものと関係しまして、今言った問題が多分日本の社会状況に照らしますと、一層深刻な問題として受け止めなければなりません。知識の科学主義的な専門化と人間の倫理的生活とのかい離ということが一層深刻になりつつある。そういう状況をどう考えるかという問題を人間科学は取り上げる必要があるだろうと思います。

それから倫理学とか生命倫理学ではもちろん様々な問題が現在議論されていますし、そこでは到底自然科学では決着のつかない様々な問題があります。人格の定義に代表されるように、価値論的な価値評価を含む問題というのは、そう簡単に実験で決着がつくような問題ではありません。そういう問題をも積極的に取り上げていくようなことでなくては人間科学の「人間」が泣くだろうと思っております。

そこで、哲学はどういう役割を果たしていくことができるのかという問題になりますが、87ページのところに若干書いておきました。様々な人間科学があり得ると思いますが、そして現在いろんな大学で一定の組織づくりが行われて、一定の追求がなされているわけですが、その中に哲学がどのように位置付くのかということを考えますと、この位置づけが決して十分ではないと思います。哲学にはやはりそれなりの役割があるだろうと思います。カレルは、人間に関する科学的諸知識の総合という大きな課題は沢山の人によっては成し遂げられがたいと、1人の優れた研究者によってなされる方が可能性があるのだと、自分はそういうことを意識しているからたとえ不十分でもやるのだ、と言っています。難しいことは分かっているけれども、不十分だということは分かっているけれどもやらなければならないのだと言っております。しかし、ずっと哲学の歴史を見ていきますと、先程言いましたシェーラーのように、やはり哲学者が哲学的人間学という理論体系の中で、当時の最新の科学の知識を生かしながら、それを1つの人間像、人間観という形に総合していったという遺産があるわけでありまして、そういうシェーラーの先駆的な業績の後にプレスナーとかゲーレンとかそういう人たちが続々と続きまして、それぞれがそれぞれの立場から人間学的な総合ということを行なったわけでありまして、そういう模範にも我々は大いに学ぶ必要があると思います。これは、個別的な科学をやっている方にも、そういう哲学的な総合の仕方とか、哲学者の発想とか、方法とか、そういうも

のをやはり理解して学んでいただきたいわけであります。

哲学という学問の性格についてはまたいろいろ議論があるわけでありますが、88ページに少々書いておきましたけれども、哲学には普通の諸科学と少し違う所があります。もちろん哲学にも形而上学・倫理学・論理学・美学など特定の対象をもった専門分野がもちろんあるわけです。専門分野があるわけでありますけれども、しかし生物学や天文学というように、学問名称からしてわかるような特定の個別的なテーマを対象にすることからは、哲学は割合自由でいられる分野です。もし、科学の発展が分析と総合、個別化・専門化と総合化という2つの矛盾した課題を抱えて展開せざるを得なくて、しかも総合を引き受ける人がなかなかいないとすれば、カレルのような天才的な医学・生理学者が出てくれば別でありますけれども、なかなか個別的な科学者の側では総合が成し遂げがたいとすれば、そういうときにはやはり哲学者がこうした課題と必要に答えなくてはならないと思います。

そういう総合が必要になるときに、人文科学・社会科学・自然科学の様々な学問領域がどのように関係するかということを考える場合に、私はたとえばピアジェのような学問分類をひとつ念頭に置きながら、緩やかな専門分野同士の相互交流、開かれた関係を踏まえて考えていく必要があるだろうと思っております。89ページにわずかでございますが、ピアジェの考え方をまとめて書いておきました。ピアジェは、自然科学・人文科学・社会科学という従来の学問分類を廃して、それからドイツで見られますような自然科学と精神科学という区分でもなくて、学問を自然諸科学と人間諸科学に分けて、新しい彼なりの学問分類を提示したわけであります。ピアジェのいう人間諸科学は、我々がいう「人間科学」とは異なった意味をもちますが、そういう分野どうしが切り離された関係ではなくて、開かれた連続と非連続の関係の上に立つ相互交換または相互交流を保ちつつ、人間科学を追究していくということを、ピアジェのこうした態度から読みとることができると思います。行動科学も哲学も心理学も人間を研究するという1つの目標のためには、たがいに排除しあうのではなくて、やはりたがいに共同して作業していくということがどうしても必要になります。

我々の大学の人間科学科の議論のときにも、例えば人間科学と人間学を区別すべきであるという意見が出ることがあります。こういうこと自体が、人間科学をどう考えるか、人間学をどう考えるかという問題と直接に関係するわけでありますけれども、何か暗黙のうちに科学というものを非常に狭く理解して、人間科学というのは人間に関する科学であるから、哲学や倫理学や宗教学が追究するような人間学とは違うのだと、それとは区別されるべきだという意見が言われることがあります。しかし注意しなければならないことは、そういう理解をした結果、これらの分野が人間科学から排除されて人間科学が人間不在のたんなる科学に転落するという危険性があるということも踏まえなければならないだろうと思います。

むしろ、今いったような考え方から、人間科学のうちに人間学的な追求をも視野に含めるような、人間科学の中に人間学的な問題意識もまた含まれるような、そういう人間科学の追究を

しなければ、21世紀の様々な科学と人間の問題に対して対処できないという可能性が生ずるのではないだろうかということを考えざるをえないわけであります。時間がきてしまいましたので、大変雑駁な報告で申し訳ありませんが、以上にとどめたいと思います。

司会 どうもありがとうございます。今の奥谷さんの報告は、第2回フォーラムで表明された3つの立場を出発点にいたしまして、人間科学という言葉の前史に戻りつつ、フランシス・ベーコン、ヒュームのサイエンス・オブ・マン、デイドロ・ダランベールのシャンス・ド・ロムなどの言葉の歴史から、また特にカレルやリントン、ギリンの評価を1つのポイントにいたしまして、日本の人間科学の重要な問題点にふれられました。その中で総合化の条件と哲学の位置とを中心をいたしまして、問題提起をされたと思います。ご質問、ご意見がありましたら是非お述べいただきたいと思います。

橋本 北海学園大学の橋本剛と申します。奥谷さんの人間科学の1番最初の源流からのお話を聞いて、十分つかめてはいないのかもしれませんが、先程の分類でいえば、要するに行動科学的な第3番目の立場に対してはかなり疑問と批判をもっていて、それをこえる人間科学というのが、要するに奥谷さんの現在の見解ということで理解していいのでしょうか。

奥谷 もっとはっきり言うておけば良かったのかも知れないのですが、72ページに整理した3つの見解のうち、私は第1、第2の見解については賛成でございますけれども、第3番目についてはそのまま受け入れるわけにはいかないというのが今日の報告の主旨です。

橋本 その際に、私も行動科学関係をほとんど勉強していない1人なんですが、行動科学の立場というのは人間を基本的にはどういうように解釈しているのでしょうか。私は、行動科学というのは操作主義で、人間そのものを操作の対象にしてしまうのが行動主義だと思っています。極端なことを言うてしまうと、人間を理解する姿勢としてはかなり危険な要素をもっている。それぐらいの理解をもっているわけですが、これについてどうでしょうか。

奥谷 79ページに多少それに近いことを書いておきました。あまり勉強していないことでありまして、行動科学の先生には大変失礼かも知れませんが、行動科学の成立とその経緯について書いた所で若干言及を致しました。やはり人間を客体としてとらえていこうというときに、刺激と反応という単純な図式、それに量化・計測化ということが非常に大きな位置づけを持つのが行動科学であろうと思います。そういう機能主義または操作主義は、人間の身体的・生理学的側面の理解には不可欠である反面、それをそのまま生きた人間の理解ということに適用しますときに、どうしても限界が出てくると考えております。行動主義が危険と言えるかどうか

は分かりませんが、危険になりうるとすれば、それは行動科学の方法、限界をもつものとは見ずに、を人間科学の唯一の方法だとみなす場合だろうと思います。

司会 ただいまの問題につきましては、奥谷さんの立場は、端的に言うと自然科学主義的一元論批判という性格をもっております。心理学の先生方からは少し違ったご意見もあろうかと思いますが、いかがでしょうか。

春木 早稲田大学の春木豊です。アメリカの心理学界では、1920年から60年ないし70年代までかけて流れをつくった行動主義心理学があるわけですが、私自身今は行動の概念は説いておりません。やはり今のご批判にありますように、とにかくワトソンの基本的な考え方からいくと、心なんていうのは科学の対象にならないから、観察できる行動を対象にすべきであるということになります。それはそれで1つの考え方ではあると思うんですが、いわゆる行動の概念がもっている本来の意味からは少しはずれていると思います。私自身、行動という概念は、生きるといいますか、人間の生命自体に直結した、かつ心とか環境あるいは身体とかそういうものを統合して全体的に人間を考えるための1つのキーワードにならないだろうかということに関しまして、今関心をもっております。そういう意味で、単純に人間の問題かつ心の問題を科学するための行動という概念は、今ご指摘があったように、ある意味でちょっと危険をはらんでいるというご意見は、私も同感できると思っております。1つの意見です。

司会 どうもありがとうございます。奥谷さんの書かれました論文がのっている、同じ『札幌学院大学人文学会紀要』第60号に、今ご発言のありました春木先生が「人間科学についての一考察」という論文をお書きになっています。そこでも行動という概念による統合についてご提言がありました。したがって、行動という概念そのものと行動それ自身の理解もまた大変な問題ではないかと思えます。他にございますでしょうか。

ちょっと私の方からですが、カレルを総合の原理として提示した学者として高く評価されていると基本的に思うんですが、それはそれでその通りという面があると思います。しかし、カレルの著書をみますと、こういうことも書いております。「解培学から経済学に至るまでの人間科学と諸科学のうち、もっとも包括的なもの、それは医学である」と邦訳の350ページにあります。それから「我々の器官と5感と体液と心は1つである。それは遺伝による傾向と成長の諸条件と環境のもつ、科学的、生理学的、人間学的要因の結果である」という表現がありまして、カレル自身の総合も、出身から申しましてかなり自然科学主義的な総合じゃないかと思うんです。だから、カレルの評価に異論も多少はあると思いますし、もう1つ奥谷さん自身が人間を総合されるという場合に、どういう基盤で総合されると言っておられるのか、そのあたりをもうちょっとはつきり出してもらえればと思ったんですが。

奥谷 カレルの評価については、今おっしゃられた通りでございまして、様々な矛盾する側面もありますし、社会学や経済学に対する評価が低いとか、歴史学に対してはかなりひどい言葉使いをしているとか、いろいろ問題はあります。75ページの下の方にも書いておきましたけれども、カレルにたいする過大評価はやはり禁物で、慎重に評価する必要があるだろうと思います。それから、私が人間の科学をどういう基盤の上に立って総合し展開していくかというきわめて根本的、本質的な問題については、残念ながら今の時点ではお答えできません。これからの課題として追求したいと思います。ただ、中野先生の今のご質問は、中野先生ご自身にそのままお返ししたいという気もするというのを付け加えさせていただきます。

司会 どうもありがとうございました。時間の関係もございまして、奥谷さんのご報告と質疑はここまでにさせていただきます。

次に細見さんをお願いしたいと思います。細見さんは、「哲学と人間学—アドルノの経験に即して—」ということで、アドルノのゲーレン批判が1つのポイントになるとお聞きしておりますが、よろしくお願い致します。

細見和之「哲学と人間学—アドルノの経験に即して」

細見 大阪府立大学の細見和之といいます。最初からお断りをしなければなりません。最初この発表のタイトルをお伝えしたときに、今ご紹介いただいた通りのことを考えていたんですが、もう少しアドルノとハイデガーを対照させる形で問題を考えようと思います。アドルノとハイデガーということになりますが、決して、哲学がハイデガーに対応して、人間学がアドルノに対応しているというわけではありません。アドルノとハイデガーという、人間科学全体からするとそれ自体非常に限定された小さな領域での議論ということになるかもしれません。ずっと私自身大学の人間科学部におりましたが、今奥谷先生の報告の中にもありましたように、総合化と専門化がいつも矛盾するという思いをしています。そして、学生に対しても僕らはいつも非常にジレンマに立たされるという問題に直面していると思うんですけど、その総合化と専門化の一見矛盾する問題を考える上で、アドルノとハイデガーの振る舞い、または方法の差異の中にあるジレンマを抜け出るといふ問題があるんじゃないかと思っているわけです。

つまり、僕らは総合というときに、あるいは総合化と専門化の矛盾、ジレンマというときにある専門化された領域の個別的な併存といいますか、前提を風呂敷のように包み込む総合化というものを考えたりします。あるいは、その個別の専門領域を導いているロジックの中から抽出できるある抽象的なロジックまたは原理というものは、例えばそれが行動心理学の場合には人間のビヘイビア、とか、それを導いている何か身体的な過程だとか、生命のプロセスだとか